

杉山真二¹: 報告—第34回植生史学会談話会Shinji Sugiyama¹: Report—The 34th forum of the Japanese Association of Historical Botany

2012年4月28日から30日にかけて、「韓国東南部の植生と植物利用」をテーマとして第34回日本植生史学会談話会が開催された。世話人は庄田慎矢氏(奈文研)と佐々木由香氏(パレオ・ラボ)で、参加者は世話人を含めて9名であった。

4月28日は、金海国際空港に現地集合した後、マイクロバスで移動して蔚山沿岸部の細竹(セジユク)遺跡と城岩洞(ソンアムドン)貝塚を見学した(案内:金姓旭さん)。細竹遺跡(図1)は、東国大(東国大学)埋蔵文化財研究所によって2001年以降に発掘調査された新石器時代早期(7000~7500 cal BP)の貝塚遺跡で、土器や石器、漁具などの考古遺物のほかに動物遺体、貝類、植物遺体が多数出土し、炭化した鱗茎が付着した土器片も確認されている。近接する城岩洞貝塚の案内板には「今後さらに学術調査を進めることで、細竹遺跡などとともに、蔚山地域の新石器時代の文化と韓・中・日3か国の文化的交流関係が理解できる重要な遺跡として評価されることになるであろう」とあり、東アジアという広い視野で調査成果を捉えようとしているのが印象的であった。

「細竹遺跡」の名称からは、竹笹類の利用も想像されるが、これまでの調査ではタケ亜科の植物遺体は検出されていないようである。「細竹」は、日本国内ではササ属のチシマザサ(根曲竹)のことをさす場合が多いが、ササ属は韓半島では島嶼部を除いて分布が知られていない。矢柄や竹細工に利用されるヤダケ属は韓国の各地に分布していることから、あるいはこれが「細竹」の由来では?と思索しつつ、世界文化遺産で知られる古都慶州に向かった。



図1 蔚山沿岸部の細竹遺跡における現地調査(提供:佐々木由香氏)。

夕食は、カモ料理、カワニナスープ、どんぐりトーフなどを賞味し、食後に瞻星台(7世紀の天文台)や菜の花畑がライトアップされて賑わう古墳公園(世界文化遺産)を散策した。普門湖近くのホテルにチェックインしてからの二次会では、当地の薬膳酒で鋭気を養いながら、ツルニンジンなどのナムル(野菜、山菜、野草を塩ゆでしてゴマ油であえた料理)の食材鑑定で盛り上がった。

29日は、朝から慶州駅近くの城東市場でモヤシなど多種多様な食材を見学し(図2)、慶州南山(世界文化遺産)の植生観察に向かった。南山(標高466 m)は風光明媚な観光地で、この季節は新緑のモンゴリナラやアカマツなどの林床にツツジが咲き誇るベストシーズンである(図3)。城南離宮址脇の登山口からハイキング気分でも登り始めたが、



図2 慶州駅近くの城東市場においてモヤシなど多種多様な食材を見学(筆者撮影)。



図3 慶州南山で咲きほこるクロフネツツジ(手前)とチョウセンヤマツツジ(後方)(提供:能城修一氏)。



図4 慶州南山頂上付近の展望所（琴松亭）にて（提供：庄田慎矢氏）。

周辺の植生に気をとられてコースを外れたのか、日曜日で天気も良いのに他の登山者を見かけない。道は次第に険しくなり、ついには両手を使って崖をよじ登る岩山登山となってしまった。何とか頂上付近の展望所（松訟亭）にたどり着くことができたが（図4）、仏教露天博物館とも呼ばれる多数の寺址や石仏を見学する余裕がなかったのは少し残念であった。山麓付近の遊歩道沿いで見かけたヤダケ属などのタケ亜科植物は、かつては矢柄や竹細工などに利用されていたことであろう。

午後は、東国大学校で考古美術史学科の安在皓（アンジェホ）教授から細竹遺跡の成果について詳しい解説があり、博物館で鱗茎附着土器など細竹遺跡の出土遺物を見学した（図5, 6）。鱗茎附着土器の存在から、ネギ属などの植物利用が新石器時代にまで遡る可能性が指摘されているが、これについては案内人の佐々木氏らにより詳細な検討が行われており、近い将来の論文発表が期待される。なお、細竹遺跡では辻誠一郎教授（東京大学）らによって花粉分析、樹種同定、種実同定、年代測定などが行われており、遺跡調査報告書で古環境復元の成果が報告されている（辻ほか、2007）。

30日は、あいにくの雨模様の中、釜山市郊外の金井山にある華明（ファミオン）樹木園を見学した。開園からまだ間もないためか樹木の植栽は支柱が目立っていたが、広大な敷地に近代的な展示施設や大規模な温室を備えた植物園が無料で利用できるのは魅力的であった。昼食は釜山港のチャガルチ市場でヒラメの刺身、タコやユムシの活き作りなどの海鮮料理を堪能したのち、金海国際空港で解散と



図5 東国大学校博物館において鱗茎附着土器を観察（筆者撮影、左端は安在皓教授）。



図6 細竹遺跡から出土した鱗茎附着土器の拡大写真（提供：能城修一氏）。

なった。

新緑の季節に、古都慶州を含む韓国東南部の植生や景観を観察することができ、遺跡や遺物および世界文化遺産などを通して日本をはじめ東アジアとの文化的交流関係を実感できたのは幸いであった。このような貴重な機会を用意して頂いた世話人や関係各位に心より感謝致します。

引用文献

辻 誠一郎・辻 圭子・安 昭炫・佐々木由香・能城修一・藤根 久・崔 基龍. 2007. 年代測定と環境復元. 蔚山細竹遺跡 I. 東国大学校埋蔵文化財研究所発掘報告書第 2 集, p. 138-144.

(¹ 〒 880-0912 宮崎市赤江 1417 古環境研究所 宮崎研究所)